

論文の内容の要旨

論文題目：中国語を第一言語とする日本語学習者の単語認知処理に関する研究
— 同形語の処理過程を中心に —

氏 名：小 森 和 子

日本語の漢語には、日本語と中国語において、同じ漢字によって表記される同形語がある。文化庁(1978)の定義に従うと、同形語には、日中両言語で意味が完全に共有されている同形同義語(S語)、両者に共通する意味(以下、共有義)があるが、どちらか一方の言語、または両方の言語に独自の意味(以下、独自義)がある同形類義語(O語)、両言語の意味が完全に異なる同形異義語(D語)があり、さらに、O語は日本語と中国語のいずれの言語に独自義があるかによって、O語(1)(日本語にのみ独自義がある)、O語(2)(中国語にのみ独自義がある)、およびO語(3)(日本語と中国語の両方にそれぞれ独自義がある)、と下位分類される(上野・魯, 1995)。

共有義と独自義の関係が複雑なこれらの同形語は、中国語を第一言語とする日本語学習者(以下、中国語 L1L)にとって、学習や習得が難しいことが、対照研究や誤用分析等で明らかになった。しかし、これらの研究は、中国語 L1L の同形語の意味に関する知識の有無を測定するのみであり、L1 の中国語と L2 の日本語の心内辞書に貯蔵された漢語をどのように処理しているのか、処理において二言語の知識がどのように相互作用するのか、といった処理の過程を検討していない。

また、心理学の分野では、二言語併用者(以下、バイリンガル)の単語認知処理に関する研究が盛んに行われており、その処理過程を説明するモデルがいくつか提示されているが、本研究が扱う中国語 L1L の同形語の処理過程は、過去のいずれのモデルでも上手く説明できない。

そこで、本研究は以下のような 3 つの研究課題を 8 つの実験から検討する。

課題 1 . 中国語 L1L の L2 としての日本語の同形語 O 語(1)の認知処理において共有義と日本語独自義の活性化は異なるのか、それは日本語習熟度と関係があるのか、

課題 2 . 中国語 L1L の L2 としての日本語の同形語 O 語(2)と D 語の認知処理において中国語義が活性化し、日本語の処理に干渉を及ぼすのか、共有義を持つ O 語(2)と共有義を持たない D 語とでは、中国語義の活性化による日本語処理への干渉は異なるのか、それは日本語習熟度と関係があるのか、

課題 3 . 中国語 L1L の L2 としての日本語の同形語の処理過程を説明する新規モデルとして、どのようなモデルが妥当であるか。

実験 1 では、日本語としての O 語(1)の単語認知処理が、共有義と日本語独自義とでどのように異なるか、を検討した。実験計画は、意義条件(共有義、日本語独自義、中立条件)を被験者内要因、習熟度条件(上位群、下位群)を被験者間要因とする、 3×2 の二元配置の反復測定で、実験方法は語彙性判断課題のプライミング実験である。実験の結果、上位群は共有義と日本語独自義の両方でプライミング効果が認められ、いずれの意味的表象も迅速に活性化されることが分かった。一方、下位群は共有義でも日本語独自義でも意味的表象の活性化が認められなかった。

実験 2 では、実験 1 の結果を正当に評価するために、O 語(2)を用いて中国語の単語認知処理過程を分析した。実験計画、および実験方法は実験 1 と同様である。実験の結果、上位群も下位群も、共有義でも中国語独自義でも、プライミング効果が認められた。このことから、L1 の中国語では、書字的表象と意味的表象が相互に活性化することが示された。

実験3では、実験1で下位群に共有義でもプライミング効果が認められなかった理由が、入力の問題か、出力の問題か、不明であるため、実験1のプライム語を中国語で呈示した場合に、プライミング効果が認められるのかを、分析した。実験計画、および実験方法は実験1と同様である。ただし、プライム語が中国語、ターゲット語が日本語の、L1→L2の実験である。実験の結果、上位群は、実験1と同様に、共有義でも日本語独自義でもプライミング効果が認められたが、下位群は共有義でも日本語独自義でもプライミング効果が認められなかった。このことから、下位群は日本語の書字的表象と意味的表象の相互活性化は、入力と出力の双方で、迅速ではないことが示された。

実験4では、下位群の結果が知識の不足によるものではなく、活性化の問題であることを議論するために、O語(1)の共有義と日本語独自義の意味に関する知識を測定した。実験方法は、一文呈示の文正誤判断課題である。実験計画は、意義条件(共有義、独自義)×習熟度条件(上位群、下位群)の2×2の二元配置の反復測定である。実験の結果、日本語独自義については、上位群の方が有意に正答率が高かったが、共有義に関しては、上位群と下位群の間に有意差が認められなかった。このことから、下位群は共有義に関しては正しい知識を有しているが、活性化が迅速ではないため、処理が遅延するということが示された。

実験5では、O語(2)を用いて、中国語独自義が日本語の処理に干渉的な影響を及ぼしているか否かを検討した。実験計画は、刺激条件(干渉語、非単語)を被験者内要因、習熟度条件(上位群、下位群)を被験者間要因とする、2×2の二元配置の反復測定である。実験方法は継時呈示の文正誤判断課題である。実験の結果、上位・下位両群共、干渉語で判断が遅延し、また誤答が認められた。このことから、下位群のみならず上位群でも、日本語のO語(2)の処理において、中国語独自義が迅速に活性化し、日本語の処理に干渉することが示された。

実験6では、D語を用いて、実験5と同様の分析を行った。その結果、D語でも、O語(2)と同様の結果が得られた。ただし、O語(2)とD語の結果を直接比較す

ると、共有義のない O 語(2)の方が、D 語より干渉が小さいことが分かった。

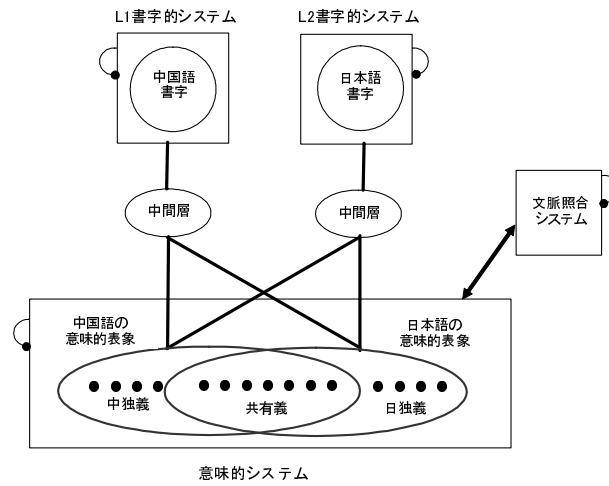
実験 1 から 6 までの結果から、同形語では中国語義の活性化が優勢であることが示された。しかし、翻訳相当語で中国語と日本語のいずれが優勢的に活性化するかを確認せずに、同形語の処理過程における中国語の活性化の優位性を議論できない。そこで、実験 7 と実験 8 とでは、同じ意味的表象を共有するが、日本語と中国語とで書字的表象の異なる、非同形語の翻訳相当語の処理を分析した。実験の方法は継時呈示の文正誤判断課題で、ターゲット語は文意に合うが、言語記号が正しくない漢字二字熟語である。実験計画は、刺激条件(適合語、非適合語、非単語)×習熟度条件(上位群、下位群)の反復測定である。実験 7 では、日本語文中に中国語のターゲット語が混入された文、実験 8 ではその反対の刺激文を、刺激とした。実験の結果、実験 7 でも、実験 8 でも、適合語の干渉が有意であった。このことから、翻訳相当語においては、L1 と L2 の書字的表象が意味的表象を媒介にして、相互に、対称的に活性化することが示された。

以上の 8 つの実験の結果、以下のことが示唆された。

1. 中国語 L1L の同形語 O 語(1)の認知処理において、L2 としての日本語の書字的表象と意味的表象における相互活性化は、L2 言語習熟度に依存する。これは、L2 の書字的表象と意味的表象との結合が弱いことによる。
2. 中国語 L1L の、L2 としての日本語の同形語 O 語(2)と D 語の認知処理において、L2 言語習熟度に関わらず、中国語義の意味的表象が活性化し、日本語の処理過程に負の干渉を及ぼす。
3. 共有義を持つ O 語(2)と共有義を持たない D 語とでは、共有義のない D 語の方が正しく処理されやすい。
4. 中国語 L1L が O 語(2)や D 語を処理する際に起こる中国語義の意味的表象の活性化の要因は、日本語の書字的表象(例:「輸入」)が中国語義(例:<input>)を活性化してしまうこと、また、下位群では、中国語義が、それに相当する日本語の書字的表象(例:「入力」)との間で活性化が起こりにくいことによる。

さらに、本研究の結果から導き出される中国語 L1L の同形語の処理過程モデルとして、以下が提案される(図 1)。

図 1 本研究の実験結果が示唆する同形語処理過程モデル



図中で示したように，同形語の処理過程においては，文脈との照合により意味決定を行うシステムの想定が不可欠である．本モデルにおける文脈照合システムの計算システムは，以下のパターンが想定される(表1)．

表 1 文脈照合システムにおける二値的計算のパターン

同形語の種類	例	中国語の転用の可否	共有義文脈の有無	中国語の抑制の要不要	日独義の有無	日独義文脈の有無	当該指示義
O語(1)	白紙	1	1	0	—	—	共有義
		—	0	1	1	1	日本語独自義
O語(2)	緊張	1	1	1	0	0	共有義
D語	暗算	0	—	—	1	1	日本語義

本研究は，図1のような新たな単語認知処理過程モデルを提示した．先行研究のモデルの多くは，L1とL2とで意味がほぼ一致している翻訳相当語や同根語(cognates)には説明力があるが，日中同形語のように，二言語間で意味的關係性が複雑な単語の処理に関しては，説明力に欠ける．また，先行研究では，超級レベルの学習者のみを対象としたものが多く，L2の習熟度の向上に伴って，処理の過程がどのように変化していくのか，検討していない．本研究は，こうした先行研究の不足やモデルの不備を補うべく，新たなバイリンガルの単語認知処理過程モデルを提示したという点で意義がある．

さらに，これまでL2習得研究では，言語知識の有無を測定し，その結果に基づく分析や記述が多かった．こうした研究では，L2学習者が当該単語を処理する

過程で、その心内で何が起きているのかを明らかにすることはできない。知識の習得を妨げる、または、誤用を引き起こす要因を検討するべく、心理学的手法を用いた研究は、L2の言語知識の処理のメカニズムを明らかにするものであり、L2習得の基礎理論研究に資すると考える。